677

特 253
756

翼賛叢書

農村と新體制

大政翼賛會總務
千石興太郎

第四輯

大政翼賛會刊行

始

特253
756

農村と新體制

大政翼賛叢書

近日發刊

大政翼賛運動の本義　總裁　近衛文麿
大政翼賛運動の發足に當りて（既刊）事務總長　有馬頼寧
生活新體制の心構（既刊）國民生活指導部長　喜多壯一郎
文化の新體制　文化部長　岸田國士
新體制と外交　常任總務　中野正剛
新體制と商工業　企劃局長　小畑忠良
新體制の農村（既刊）總務　千石興太郎
新體制下の青年の任務　青年部長　栗原美能留
新體制と國防（既刊）協力會議々長　末次信正
新體制と婦人　翼賛會宣傳部編
新體制と子供　翼賛會宣傳部編
新體制と體育運動　末弘嚴太郎

時局を乘切る
農業者の心構へ

國家と國民の盛衰を、一擧に賭ける大戰爭を、いま我が國がやつてゐるのであるから、その影響を蒙らない人はない。商人も困らうし、農業者も辛苦を忍んでゐる。よそ眼には樂だと見える職業も、その中に入つてみれば、世間には知られぬ苦勞があるものである。それで宜しいのである。戰時經濟、統制經濟といふと大變喧しく聞えるが、要は國民の總

べてが一樣に苦難をともにしてこの時局を乘切ることで、要約すれば國民の心構へは、近衞首相の述べるやうに、「上御一人に對し奉り日夜それぞれの立場において奉公の誠を致す」ことであり、また政府の國民に對する態度は掛値なく「一人の暖衣飽食をも許さぬ代りに一人の餓えたる者も出さぬ」ことでなければならぬ。

もと〳〵、我が國の農業者は勤勉なることにおいて他に比類なく、質實、剛健よく國家興隆の礎をなしてきた。その農業者が、戰爭開始以來、應召のためや軍需工業へ、働き盛りの人をたくさんとられたあとは、健氣にも「後のことは己達でやらう」と、今までよりも早起き、夜業をするは勿論、烈しい勞働の合間々々の僅かな休みすら節してどうやらやつてゐる。生活においてもさうである。かつて贅澤を知らぬ農業者は、肥料や農業生產資材の不足こそ苦情をいふが、着物や食物の窮屈なことにはさしたる不平もいはず、營養と勞働の不釣合、ひいては彼等の體位の維持、向上はむしろ傍の憂慮するほどである。

高度國防國家建設への途

さて、農業者がいまこのやうな狀態にあるにもかゝはらず、我等は農業者とともに更に一段と奮起し農業に精勵しなければならない。といふのは、農業は平時にあつても重要な產業であるが、とりわけ戰爭になるとその重要性を增すものであるからである。

戰時に際會して農業に要求されるものは食糧の確保であり、軍需用品の供出であり、輸出農產物の增大である。殊に外國からの供給が減り、外地からの移入が思ふやうに行かぬ場合さうである。食糧の不安が銃後の國民生活に、言ひかへれば國民の志氣にどれほど强く影響し、反對に敵國の抗戰意識を昂めるかは昨年末から今年初にかけての短い間におけ

る、米穀出廻り不圓滑の示すところである。これは無論農業者のみの責任ではないが、今後かゝることを繰りかへすやうなことがあつては、いままでの御奉公が無駄になることを、我人ともに銘記せねばなるまい。

更にこのやうな緊迫せる時局が、後で述べるやうに續くとすれば、農業の地位は一層加重される。十一月から始る明米穀年度の食糧需給は、今年よりもつと窮屈であることは、敢へて政府の說明を待たなくとも當然豫想される。そこで、政府でも十一月からは自家用米を除いた米は全部政府の手に納める、所謂米穀の國家管理を實施する運びとなつた。自分の作つた米を政府にとり上げられるなぞと考へる農業者は一人もない

筈である。かゝる情勢を農業者はかう解すべきである。

第一には、食糧の重要性が戰爭の進むにつれ益〻加はり、産業としての農業が國防國家の上では、政府が原料を支給し、製品は全部納めさせる、飛行機や大砲の製造をする、重工業と同じ程度にまで重要なものになつたといふこと。第二には、いままでの生産や配給の方法では農家の作つた米なり、麥なり、或は林業、漁業を含めて言へば、木炭なり魚なりがいろ〳〵の手を廻り廻つて、終局において國のためになつたのであるが、今度は生産された米・麥・木炭が直接總力戰に參加するばかりでなく、農業者の振るふ一鍬一鍬、樵夫の打ちおろす一鉈一鉈が、直ちに

戰爭の遂行に結びついたことである。實際さうなのである。いふならば、今までは何かの仲立ちがあつて、間接に國家に御奉公してゐたのが、今度は直接御奉公が出來る仕組になつたといふことである。

一方において曠古の大戰爭に從ひ、他方波荒き太平洋を隔てて米國に對峙する我が國は、高度國防にしなければならぬといふ。そのいふところの高度國防國家とは、單に武力を充實するばかりでなく、政治も、制度も、産業も、文化も凡てを國防に密接に結びつけ、その目的に向け發展させることである。さきに述べたやうに米穀の國家管理は、實にかゝる方向への具體化であり、實にその先驅であり、農業の地位の躍進であ

る。米を例にとつたが、米綿の輸入困難が豫想される今日の生糸、營養食料としての魚類等、今後も同じやうにお役に立てる部面は、多々あるのは農業者の誇りでなければならない。

新體制への農業者の覺悟

農業の重要性が加はることは、とりも直さず、農村・農業者の重要さを增すことである。古來、農業者は質實で、他の產業に從ふ者に比べ損

得の觀念に薄いものであつた。次第に世の中がせち辛くなるにつれ、自然農家でも算盤を彈くやうになつたが、それでも勞力や肥料を惜しまず、ひたすら增產に努めるのが一般の氣風で、心强い限りである。農業者は既に公益のために働いた人々である。だからさきに述べた、高度國防國家建設の一部門としての農業・農業者としての意識に立ち歸へるならば農業者はおそらく自家用米として割り當てられた米も節して供出するはずである。私は、日本農民はかゝるものであることを確信し、農業者がこの機會において、一層自己の天職を自覺し、他の職業に從ふものもまたこの機會に、農業の重要性を再認識されんことを望むものである。

さうしてまた、かゝる自覺と認識とは、世界の動きからも當然生まれなければならない。いふまでもなく我が國は、現に支那を相手として大規模の戰爭をしてゐる。その敵國支那を最も露骨に援助してゐるのは、英國であり、米國である。少くともこの二國は公然たる敵國でないまでも、强度の敵性を帶びた國々である。

獨伊はこれまた現に英國を相手に鎬を削つて力鬪し、英國を援ける米國と對立の狀態にある。その獨伊と我等は手を握り、日獨伊同盟を結んだのである。であるから我が國の國際間に進むべき道は、天體における太陽の進む軌道の如く、定つてきたのである。日獨伊の三國がそれ〴〵の天地で、世界の新秩序の創建を目ざし、或は東亞共榮圈の確立に努むべき民族的使命を負はされたのである。その道が如何に荊棘に滿ちてゐやうとも、最早後退は許されない。

さきに私は、高度國防國家とは如何なるものであるかを述べた。世界のこの動きを見ては、最高度の國防國家建設に、何人も異論がないばかりでなく、勇躍してその建設に奮ひ起たざるを得ない。さて、その高度國防國家を作るには、國內の體制を前述のやうに整へるばかりでなく、その體制を日滿支はもとより、更に南方佛印、蘭領印度にまで擴大し、茲に東亞共榮圈を完成することは近代戰の性質上絕對に必要である。國

家構成の面から見れば高度國防國家の建設で、それを地理的擴がりから見れば、東亞共榮圏の確立といふことになり、この共榮圏においては廣く文化、産業において有無相通ずるのが、原則でなければならぬ。

既に我が國が、かゝる世界史的使命を帶びて立ち上つたとしたならば、敵國を降すは勿論、敵性を露骨に帶びる國々に、遠慮は要らぬことである。

「斷じて行へば鬼神も避く」といふ。いまに及んで米國の思惑を窺ひ、英國の出方を顧慮するがごときことは、我等の與せざるところである。外交も戰爭と同じく意氣の旺んなるものには敵し難い。一方が攻勢に出

でれば、他方が引込むのが常道である。いまにして他國の動向を窺ひ、この大使命達成を遲延せんか、その失ふところはかり知るべからざるものがある。私をして極言せしめんか、一日の遲延は一日の損、つまるところは日本國力のヂリ貧を致すのみと。

私が敢へてこの極言をなした所以のものは、不幸にしていままでの政治にかゝる傾向が多分にあつたのと、國民の認識にこれだけの徹底さが缺けてゐたからで、それであればこそ、國民が擧つて新體制の確立の必要を痛感し、その完成を急ぐわけである。

上來、農村の新體制につき所見を述べたが、畢竟するにその要諦は高

遠のところにあらずして、近きにあるを知るのである。我が民族に課せられた大使命の目ざすところは雄渾、壯大ではあるが、その行手には幾多の障碍が横はつてゐることを、深く認識されんことがその第一である。

第二には、かゝる認識から發する、農業者の天職に對する自覺である。職域に於て奉公するといへば、大變難しいことに聞えるが、いまの時局を正しく見つめ、農業者古來の傳統である、國の御寶としての働き、言ひかへれば國民の總べてを餓ゑしめないやう、凍へしめないやう努めればよいのである。自分等の一擧手一投足が、そのまゝ國力の培養になり、戰爭の完遂につながつてゐるといふ自覺である。これは農業者にとり難

しいことでなく、かゝる自覺に一層深く徹することである。

第三には、この聖戰の完遂、高度國防國家の建設には、農業の果すべき役が非常に重くなり、同時に農業者の重要性が加重されるといふことである。かゝる責務の加重に對し、農業者の應ふべき道は、いままでにも增し、業務に精勵し、一握りの米、一握りの麥、一片の木炭でもより多く生產し、我等の擔當する部面から、高度國防國家建設のプログラムを破綻せしめないことである。

以上のやうなことは、私をしていはしむれば、事變の擴大とともに、他人にいはれなくても農業者の心奥には萠し、育つてゐたはずである。

その芽を成長させ、繁茂させるのが大政翼贊會の任務となるであらう。

さうして、かゝる自覺を成長させるためには、他面農業者をして、自覺に基き活動しやすいやうに仕組、制度を變へることが必要である。精神のみ旺んにして、制度百般舊態依然としてゐては不可である。かく思ふとき、私は年來の主張である農業諸團體の統合を、一日も速に實行されんことを、農業者とともに强く望むものである。さうして、その方向は獨善に流れず、深く農業者の望むところを洞察し、お互に協力して築き上げることである。同時にかゝる手心は、農業政策全般においてとらるべきは勿論で、かくてこそ農業の新體制は作られるのである。

403
512

昭和十五年十二月十日印刷
昭和十五年十二月十五日發行

大政翼贊叢書第四輯

定價金三錢

編輯兼發行人　東京市麴町區丸之內三ノ一四　入澤文明
印刷人　東京市小石川區久堅町一〇八　大橋松雄
印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社
發行所　東京市麴町區丸之內三ノ一四　大政贊賛會宣傳部

禁轉載

終